

第2章 ～前史～ 有限会社花巻鉄工所

昭和15年～昭和24年

伊藤進康氏、元社員 伊藤進氏、及川健氏、佐々木邦夫氏に聴く

～花巻第一の会社でした～

昭和13年に高橋常吉が亡くなると、長男幸助、四男吉助、五男泰助の三兄弟が昭和15年に有限会社花巻鉄工所を設立し、農業機械製造を主な営業品目とし、事業を拡大していきました。昭和18年には工場を14棟建て、日本製鐵株式会社釜石製鉄所の協力会社となり、150名を超える従業員を雇用していました。終戦直前、釜石が米軍の艦砲射撃に合い、釜石製鉄所が操業停止となった際、花巻市相生町の国鉄線路脇にあった花巻鉄工所で預かっていた鋼材数量は2000tに及んだとのことでした。

当時、花巻鉄工所の傍にお住まいの伊藤進康さんと、従業員であった伊藤進さん、及川健さん、佐々木邦夫さんに当時の様子についてお話をお聞きしました。

「花巻鉄工所」はどんな会社でしたか。

一言でいえば、戦後昭和20年に新興製作所が出来るまでは花巻第一の会社でした。従業員も150人程居りましたし、太平洋戦争の時代、兵隊に行かない人は皆ここで働きました。羽振りが良かったですよ。事務所、工場は花巻市相生町の国鉄線路脇にあり、材料や製品を運ぶのに大変便利でした。

どうしてそんなに羽振りが良かったのでしょうか。

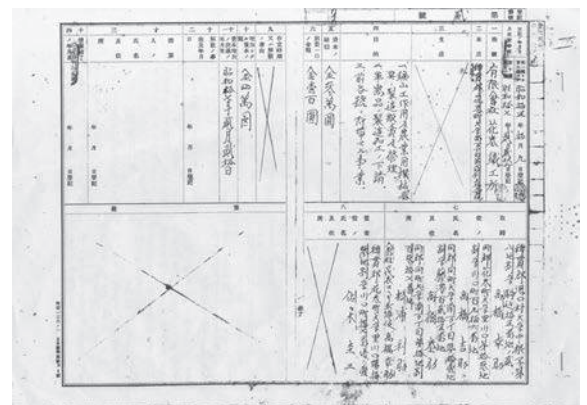
ほら、当時は戦争をしていた時でしたから、会社は軍需工場の性格を帯びて需要が大きかったのです。何もない時代、倉庫には鉄鋼材としての銑鉄や石炭・コークスなどがいっぱいありましたよ。恐らく、県の鉄工連、あるいは県経済連を通して材料が運ばれていたのではないのでしょうか。



伊藤進康氏



伊藤進氏



花巻鉄工所登記簿謄本



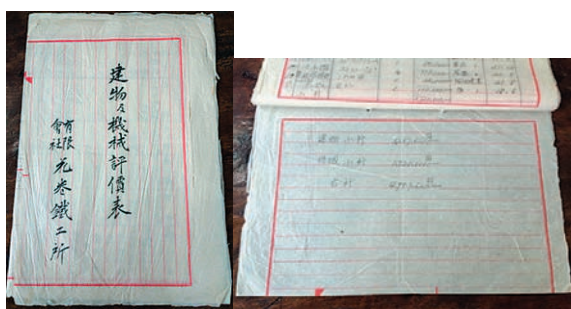
長男 高橋幸助氏



四男 高橋吉助氏



五男 高橋泰助氏



花巻鉄工所建物機械評価表 合計4,957,620円

ところで、その会社はどなたが作られたのですか。

高橋幸助・吉助・泰助三人のご兄弟が昭和15年に作られた会社です。初代社長は幸助氏で、製造部長が吉助氏、営業部長が泰助氏でした。その後吉助氏が社長になられ会社を引き継がれました。

高橋幸助・吉助・泰助の三人のご兄弟は、明治中期花巻町にその人ありと知られた名棟梁“高常さん”こと、高橋常吉氏のお子様です。高常さんは高常組製作所を起こし、花巻市石神に工場兼事務所を建て、水車による精米加工や鉄工業を始められました。この工場、大正時代のモダンな建物は今も石神にあり、当時の面影を残しています（その後解体されました）。

この製作所の歴史で特筆すべきことがあります。社長高橋常吉こと、高常さんは水車大工としては近郷に右に出るものはないと言われ、気仙沼から盛岡まで広く知られた方でした。また、ご長男の幸助氏は大正時代まだ建設製図が不十分であった頃、通信教育で製図を学び新規矩法を創案し「建築規矩法」（11部全3巻）を執筆され、建築実務関係者の大きな力となられた方です。そして、泰助氏はその後会社を離れ製菓販売店を開業し、あの銘菓「賢治最中」を考案販売された方です。

花巻鉄工所はどんな形で創業されたのですか。

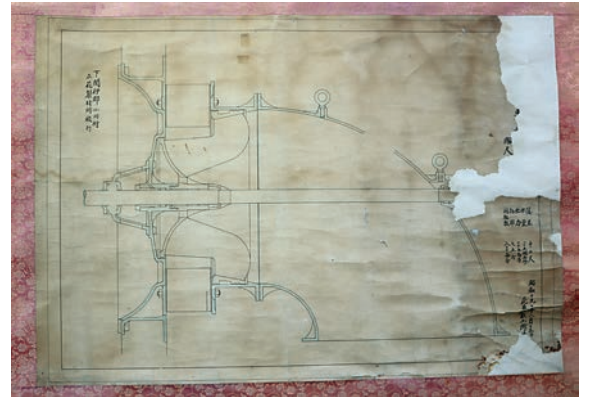
ご長男の幸助様はお父様の常吉様と高常製作所で働いておられたようですが、昭和13年3月3日常吉様が突然亡くなられ、三人のご兄弟が製作所を引き継ぐことになられたとお聞きしました。特に、後に中心となられ花巻鉄工所を継がれる吉助様は、それ以前は函館に居られて木型木工製造のお仕事しておられたとも聞いております。こうして三人のご兄弟が製作所を引継ぎ協力し合い、木工製造から新たに農機具脱穀機や紡毛機の製造販売修理を行い、事業を拡大して行ったようです。

昭和10年代に入り戦時色が濃くなり、世の中の状況も変わりました。昔の花巻の大通りには国鉄の貨物倉庫や砂糖・塩倉庫、県信連の建物などがあり駅も近く、材料や製品の搬送に何かと便利な場所であったことから、国や県から

の後押しもあって石神町から相生町大通りに工場を移し花巻鉄工所を設立したのです。昭和15年10月9日のことでした。その登記簿の取締役の欄には社長高橋幸助、製造部長高橋吉助、営業部長高橋泰助とあり、目的の欄には

- 一、鉱山工作用及農業用機械器具ノ製造販売及修理
- 二、軍需品ノ製造加工ノ下請
- 三、前各号號ニ附帯スル事業

と書かれております。（前頁参照）こうして花巻鉄工所は創業され発展していったのです。



花巻鉄工所の下閉伊郡立花製材所殿機械設計図(昭和19年)

皆さんはいつ頃入社されたんですか。

私達三人は小学校高等科時代、昭和18年10月から3月まで学徒動員として花巻鉄工所で働きました。当時、花巻で学徒動員として働くところは花巻鉄工所と釘工場（北東金属㈱様）の二か所のみでした。その後、学校卒業と同時に入社したのです。昭和19年4月ことです。入社当時の月給は一日1円でしたよ。

どんな製品を作っていたのでしょうか。

立万力にトロッコ、プーリーも作っていました。トロッコは当時今でいうダンプの役を果たしていたもので需要が多かった。それに脱穀機、当時「つばめ号」が人気でね。その製造・販売・修理を行いました。馬耕（田んぼを馬で耕す機械）も作りました。戦争が始まって国や県からの要請で金属加工・溶接作業もやりましたし、通信機の部品製造もやりました。今想えば、鉄工に関するものは何でも作っていたなあ。

当時の労働はどんな形でしたか。

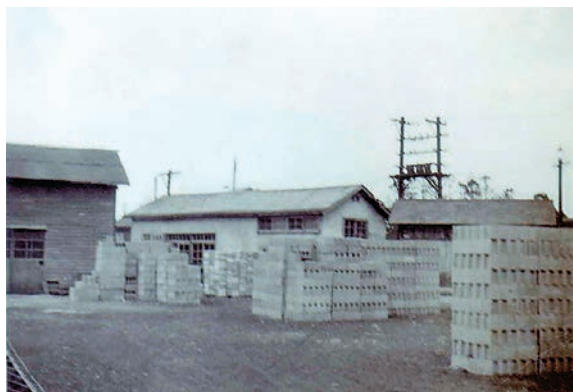
労働時間は午前8時から午後5時まで、8時間労働でした。会社の玄関にタイムレコーダーがあってカードを入れて入社。昼食には毎日わかめ汁が出されました。美味かったなあ。そして午後5時終業。その後、風呂に入って退社でしたね。



及川健氏



佐々木邦夫氏



ブロックが積まれた敷地

その後、会社はどのようになって行きましたか。

花巻にもぽつぽつと鉄工所が出来始め、花巻鉄工所で働いた人がそちらに出て行くようになりました。その意味では、花巻鉄工所は職人を育てていたとも言えるでしょうし、花巻地方の鉄工産業の礎を築いたと言えるかも知れません。

会社の経営はどうだったのでしょうか。

戦争も終り国の援助もなくなり、北上にも鋳物工場が出来るなど会社の経営は以前のように行かなくなっていったようです。そんなことから、会社は鉄工製品からブロックを作るなど、建築関係にシフトを変え懸命の努力をしたようです。しかし、時代の流れには逆らえず、経営は悪化して行ったようです。

花巻鉄工所は倒産したのでしょうか。

倒産はしてないですよ。苦しいながらも会社は続いています。花巻に鉄工の火は消さなかった。今になって驚きながら感謝していることがあるんですよ。それは年金のことです。

ほら、少し前、厚生年金問題がありましたでしょ。あの時、国民の共済掛け金の調査が行われました。その結果、当時の会社が共済金を掛けていてくれたことが分かったんです。昭和17年厚生年金制度が施行された時、会社は4月から1円5銭の掛け金で年金に入っていたのです。お陰さまで2万円程年金が上がりました。戦争時代から敗戦の時代、あのどさくさ時代によくもまあやってくれもんです。当時経営に当たられた方々は先を読んで我々職員のことを考えてくれていたんですね。ありがたいことです。本当に…。



当時の出納長

ところで、皆さんとともに働かれた高橋吉助社長さんはどんなお人でしたか。

まあ一言でいえば、職人氣質の人と言えるのではないのでしょうか。良い製品を作るのに一生懸命で、そのためにはお金に無頓着と言っていい方だったと思います。吉助社長様は平成24年に109歳で旅立たれたのですが、その葬儀の弔辞に次のようなものがあります。

「自分が考えて設計したものはお客様からの仕事を止め



左から伊藤進氏、佐々木邦夫氏、及川健氏、伊藤進康氏

させてまですぐに製作させ、ご自分の設計技術者としての好奇心を満たそうとする方でした」と。

そして、仕事は気合いをこめてやられる方で、何かを始める時は決まって手に唾をつけ、「さあ、一丁やるか」と言っ
て手を力強く擦り合わせるのが癖でした。仕事で怪我などし
ないように心を込めて仕事に励んでいたのだと思います。私
達もその姿に励まされ勇気づけられたものです。今も懐かし
いお姿です。

花巻鉄工所の成り立ちや戦中戦後のお働きぶりなど、知ら
ないことを沢山教えていただきました。会社の歴史に止め置
くべきことばかりです。ありがとうございました。



最後列中央が高橋吉助、その左が高橋泰助
中央列中央の右でネクタイをしているのが高橋幸助



前列左4人目は三菱重工社長郷古潔(岩手県出身)、後列左端高橋吉助